

ハンターと仮想の世界

黒牙雷真

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ひよんなことから転生することになった主人公。主人公は神様から特典を貰い転生する。そんなありきたりな物語である

目次

剣の世界

ハンターと剣の世界1	1
ハンターと剣の世界2	5
ハンターと剣の世界3	10
ハンターと剣の世界4	22
ハンターと剣の世界5	33
ハンターと剣の世界6	42
ハンターと剣の世界7	65

剣の世界

ハンターと剣の世界1

白く何もない場所で一人の少年が横たわっている。その直ぐ側には白いローブを着た。魔法使いの老人が一人。

少年? 「……………」

老人 「いい加減、起きろ」

少年? 「ん、ん?」

老人? 「ようやく、起きたか」

少年? 「ここはどこだ? それには俺は…………たしか」

老人? 「記憶が曖昧のようだな。仕方あるまい」

少年? 「爺さん、あんた何か知ってるのか?」

老人? 「爺さんではない、私は……………神だ!」

少年 「あー、そういうネタはいらないんで」

神様 「まあ、いい。君には転生してらうからね。

かりやりゆうが
狩谷龍呀くん」

龍呀「今、なんと？」

神様「だから転生してもらおうと言ったんだよ。拒否権はないから」

龍呀「まあ、いいや。転生って言うには特典か何かくれんのか？」

神様「君が望む物を言えばいい。ただし、転生先はこちらで決めてるからね」

龍呀「なら、その転生先を教えてくださいよ。転生先によつては特典を慎重に選ばないとヤバいからな」

神様「わかった。転生先はなんと……ソードアート・オンラインです」

龍呀「ああ、あの剣で無双する世界か」

神様「そうだよ」

龍呀「なら、俺の記憶に唯一ある。モンスターハンターにするわ」

神様「モンスターハンターには種類がかなりあるけどどうするの？」

龍呀「そうだな。防具は4Gの全てに他には二つ名シリーズで、武器は4Gとダブルクロスの全て。あとはスタイルと狩技もつけてよ」

神様「それだけ有ればチーターだよな」

龍呀「けれど、命をかけてるんだ。これくらいないとまた死んじまうからね」

神様「わかった。あつ、転生先の情報は完全に消すからね？」

龍呀「わかった。その方が面白いかもしれないしな」

神様「それじゃ、行ってらっしゃい」

転生者こと、狩谷龍呀の足元はお約束のように開き、落下していく

龍呀「このクソ神がああああ!?!」

神様「あつ!ボウガンや弓は付けたけど、弾やピンが無いじゃん。そうだ!いつそうのことアイテムとオトモアイルもつけてしまおう。そうと決まったら。チンカ
〜ラホイ!」

~~~~~

【設定】

主人公【狩<sup>かり</sup>谷<sup>や</sup>龍<sup>りゅう</sup>呀<sup>が</sup>】

プレイヤー【リュウガ】

特典【モンスターハンター4Gの防具、二つなシリーズ、モンスターハンターダブル  
クロスの武器、狩技、アイテム、オトモアイルー】

スタイル【ギルド、エリアル、ブシドー】

~~~~~

作者より

この作品はかなり前に書いたもので設定が曖昧ですが
読んでいただいた方には感謝を言わせていただきます
ありがとうございます

ハンターと剣の世界2

神様から転生させてもらい、次に目を開けた場所は森の奥深くだった

龍呀「どこだ、ここ？それに目線の左上にあるのはステータスか？」

それから色々確認していくと、右手を下にスライドさせるとステータスメニューが出て来て。今の自分のステータスを見ると……………

龍呀「名前はリュウガ。レベルは1で、防御力は5。つうか、レザーの一式とハンターナイフしか装備してないじゃん!？」

そんなことを口にはしていると体が青い光に包みこまれた

リュウガ「次はなんだ？」

青い光が収まると何処かの街の広場にいた。それから時間が経つと空から赤い血のような物が空中に集まりだし、人になる。そして、その人のような奴が話しを纏めると……………

- 1、このソードアートオンラインからは自発的にログアウトできない
- 2、HPがゼロになれば現実でも死ぬ

3、一切の蘇生手段はない

4、第100層のボスを倒せば、この世界から解放される

リュウガ「へえ。やっぱり本当にソードアートオンラインの世界なんだな」

そんなことを言葉にしていると他のプレイヤーたちは、自分たちのために動き始めたリュウガ「さて、俺も動きますか。まずは宿を決めないと」

俺は直ぐに宿屋に行き、神様からもらったであろうモンハンの装備をアイテムストレージから探した

リュウガ「おつ！あつた、あつた。てかライトやヘヴィ、弓まであるとか……それにまさかのアイテムまでとは……チートを通り越してバグだな、こりゃ。使う時はマジで注意しよう」

神様からの特典が見つかったので、じっくりと確認していく

リュウガ「よし。初回はレベルを上げないといけないからベリオX装備でいくか」

俺はベリオX一式を装備してステータスを見るとやはりと言うべきかチートである

リュウガ「流石、Xシリーズだけなことはあるな。スキルが回避性能+3、氷属性攻撃+3、体術+3とはね。だが気力回復が落ちるのは痛いな。武器はこれかな？

しんせついちもんじげんじつ
深雪「一文字【幻日】」

俺は武器と防御を装備してフィールドに出てレベルを上げることにした

はじまりの街から出てから約4時間、時刻は22時を過ぎている。なので辺りは真つ暗である

リュウガ「ふう〜、約4時間でレベルが5まで上がったか」

俺が一息ついていると……………。どこから少女の悲鳴が聞こえてきた

少女「きやああああ!?!」

リュウガ「おいおい、こんな真夜中に一人でいるとか自殺行為だぞ!」

俺は悲鳴が聞こえた方向かうとイノシシ型モンスター四匹に囲まれてる紫の髪をした少女を見つけた。

リュウガ「おい、伏せてろ!」

少女「は、はい!」

少女は俺の言葉通りにその場に伏せた

リュウガ「狩技! 桜花気刃斬!!」
おうかきじんざん

俺は一度バックステップを踏み、右から時計回りに回転しながらモンスターを太刀で切り刻んでいく。その後、モンスターはポリゴン状になり消えていく。辺りを見渡してから俺は太刀を背中の鞘に納める。

リュウガ「大丈夫か？」

少女「うん、大丈夫。さっきは助けてくれてありがとう。ボクはユウキ。よろしく」

リュウガ「そうか。俺……………」

あつ、ヤバい。ここで名前をそのまま出したら面倒なことになりかねい。そうだ！モンハンならではの名前を使えばいいじゃないか！

ユウキ「どうしたのお兄さん？」

リュウガ「いや、俺の名前はハンターだ」

ユウキ「ハンター……………。うん、覚えたよ！改めて、さっきは助けてくれてありがとう、ハンター！」

リュウガ「何、人を助けるのに理由なんて要らないからな」

ユウキ「ハンターは優しいね」

リュウガ「ところでユウキ。何で、こんな真夜中に一人でいたんだ？」

ユウキ「えつと……道に迷った的な……」

リュウガ「なら、一緒に街に戻るか？」

ユウキ「え？いいの？」

リュウガ「ああ。俺もちょうど街に戻るところだったしな？そ」

ユウキ「じゃあ、お願いしようかな？」

リュウガ「了解だ。それとこの防具のことは他言無用で頼む」

ユウキ「うん、分かった」

こうして、俺とユウキは一緒に、始まりの街に戻ることにした。

この時が俺の運命の歯車とユウキの運命の歯車が噛み合った瞬間だとは俺もユウキは思いもなかった。まさに、俺たちの運命は神のみぞ知る。

ハンターと剣の世界3

ユウキとの出会いから一緒に行動する様になり、一週間で過ぎたところ、俺はユウキと別行動に出た。そして、それから二週間が過ぎ。この世界に転生し、デスゲームが始まって計約1ヶ月が経過した。

リュウガ「1ヶ月が経っても解放されないとか、マジでゲームクリア以外は解放手段は無い感じだな。俺、原作を知らないからどんな展開になるのか、あまり分からないんだよな」

それから、トールバーナと言う街に着くとローマにある劇場？みたいなところでボス攻略会議が開かれるらしく。俺は白疾風の一式装備で武器は『マスターニンジャソード』を装備して木の上から会議を観察している。

え？なんで会議に参加しないのかって？そんなの決まってるじゃん、この装備を見られてたら何を言われるか……。あと装備はなんとかなく忍者ほくしてみただけです。はい。

ディアベル「はーい、これから第1回ボス攻略会議を始めたいと思いまーす！なので……」

ディアベルと名乗る青髪の青年が筆頭にボス攻略会議が進んでいく。途中で関西弁を喋る邪魔者のせいで話しが止まったが……。日焼けしたスキンヘッドの男が関西弁論破し、その後の会議は滞りなく終わった。

リュウガ「よし。終わったな。レベル上げの続きでも行くか……。よつと」

俺はこの後、木の上から飛び降りたことを後悔した

???「うわ!?!お前、何処からわいてきたんだ?」

リュウガ「ん?」

飛び降りて、声ができる方を見るとフードを被った。女の子?プレイヤーに見つかった???「それに、その装備はオレっちも見たことがないゾ!」

リュウガ「お前……誰だよ?」

アルゴ「ああ、悪い。オレっちはアルゴ。情報屋を生業としているものダ。鼠の情報

屋と言えはわかるだ口？」

リュウガ「ああ、さつき……えつと……。

そう、エギルだ！さつきの劇場でエギルのオツサンが話してガイドブックの発行主か？」

アルゴ「そうダ。でだ、お前さんのその装備の情報をオレっちに売ってくれないか？それと名前も教えてくれ」

リュウガ「それは無理だ」

アルゴ「えー!?頼むヨ。お姉さんを助けると思つてサ」

リュウガ「無理なものは無理だ」

アルゴ「なら、こうしよウ。お姉さんと取引するのはどうダ？」

リュウガ「取引？」

アルゴ「そうダ。オレっちは情報屋だからあちこちで情報を集めないといけないんだ。そこでダ！お前さんにも情報を集めて欲しいダ。特にモンスターの情報をナ？こつちも、情報の質によつてはお金を出すゾ」

リュウガ「ふむ……」

俺は暫し考えることにした。多分、遅かれ早かれ俺はこの世界では目立つ。なら今のうちに信頼が持てる人間を少人数は欲しい。特に情報屋と雑貨屋、加治屋とかだな。

だったら、このアルゴと名乗る情報屋と取引をしてもいいのではないだろうか？そうと決まれば、取引開始だ。

リュウガ「いいだろ。ただし、これはお前のことを信頼して取引するから。もし裏切れば、どうなるか分からないぞ？悪魔と取引をする気はあるのか？」

アルゴ「そ、そう言われると………」

アルゴは、さっきの俺と同じ様な暫し考える

アルゴ「分かった！その取引に応じよう」

リュウガ「OK！なら何処か二人だけになれる場所で取引の話しをしたい。何処か知らないか？」

アルゴ「お、お前！二人きりの部屋でオレっちにどんな卑猥なことをする気だ！」
ダ
キッ

とアルゴは自分の体を抱きしめ距離を取る

リュウガ「おい、てめえ！いい度胸してんじやねえか！なら取引の話しは無くしてもいいんだぜ？」

アルゴ「ちょよ、ちょよとしたジョークじゃないカ！怒るなヨ！」

リュウガ「次は無いからな」ゴゴゴゴ

リュウガから何か龍を思わせるオーラがアルゴを威圧している

アルゴ「わ、分かった。これから気をつけるヨ」

それから俺とアルゴは、とある宿屋に向かうことにした

宿屋について部屋に入り。早速、取引に入る。

リュウガ「ここなら、誰にも聞かれないんだよな？」

アルゴ「ああ、お前さんが許可を出さない限りは聞こえないはずだ」

俺は情報漏洩の危険がないのを確認してから、頭の防具だけ外し、素顔を見せる

リュウガ「了解だ。まずはプレイヤーネームだが、リュウガだ。それとこれは人前では呼ぶなよ？」

アルゴ「分かったてるけど。人前の時はなんて呼んだらいいんだ？」

リュウガ「そうだな……。狩人こと、ハンターで頼む」

アルゴ「その名の由来ワ？」

リュウガ「モンスターの情報を集めるためには沢山のモンスターを狩るだろ？」

アルゴ「ああ」

リュウガ「だから、モンスターを狩る者として、ハンターがじっくりくるんだよ」

アルゴ「なるほどな……分かつた。人前では、ハンターと呼ぶことにするヨ」

リュウガ「ああ。頼む、アルゴ」

アルゴ「そうだ！フレンド登録もしようぜ」

リュウガ「そんな機能があるのか？」

アルゴ「え？ちよつと待て……。お前さん、ベータ経験者じゃないのか？」

リュウガ「いや、違うが？」

アルゴ「くく!!」

アルゴは俺がベータ経験者じゃ、ないと聞くと声のならない叫びをあげながら顔を天に向けて、右手で顔を覆う。

それかれはアルゴから、スイッチやPOTローテと基本的なことを教えてもらった。

それから俺の今、装備している白疾風の性能のことを話したら、かなり驚いていた。

その後はアルゴが用事があるとかで、何処かに行ってしまう。それからは何もなく、日は沈んでいった

アルゴとの取引から翌日……。うん、寝坊しました。だってアルゴからメッセージが来てるね。内容は早く起きてボス攻略に向かえってさ。しゃあない。行くか……

俺は迷宮区をどンドン進んで行くと金属がぶつかり合う音がしてきた。奥に進むに連れて金属音は激しさを増していく。ボス部屋の前に着くとガラスが割れる音が聞こえた

リュウガ「二人、死んだか」

【BGM：英雄の証】

そんなことを口にしながら、アカムトX一式装備で背中にある大剣の『霸神剣イクセエムカム』を引き抜き。片手で持ち上げ肩に担ぎ。ゆつくりとボスに向かって歩き出し

……

リュウガ「いつちよ……。一狩行こうぜ!!」

と自分自身に活をいれる

《Sideキリト》

キリト「(ディアベルが死んだことにより、士気が急激に落ちた。どうする!?!ここままだと全滅だぞ!)」

俺が頭の中で、どうやってディアベルを失ったことによる士気を元に戻すかを考ええていると、部屋の入り口から、ガジャン!ガジャン!ガジャン!と鎧が揺れる音が聞こえてくる。赤い鎧を身に纏い。大きな剣を担ぎながら。鎧の男?はこう叫んだ。

鎧の男「いつちよ……。一狩行こうぜ!!」

キリト「アンタ、誰だよ!?!それに装備はどうやって?」

鎧の男「今はそんなことよりも体勢を持ち直せ」

それから、鎧の男がボスと戦闘を始める……。まさに圧倒的であった。ボスの野太刀を持ち前の大剣でことごとくパリィしていく。それを俺たちは啞然として眺めていると……

キリト「す、すげえー……」

鎧の男「何をサボッてやがる!俺がコイツの攻撃を捌いてる間に体勢を持ち直すことも出来ないのか、腰抜け共が!」

その声に攻略メンバーは一気に士気を持ち直した

「アイツだけにおいしいところを持っていかれるかよ!」

「そうだ！ディアベルさんの仇だ！」

「俺たちだつてやれるつてところを見せてやる！」

「あんなにボロクソ言われて退き下がれるかよ！」

攻略メンバーは次々とボスにアタックして行く

アスナ「私たちも行きましょう」

キリト「あ、ああ！」

俺たちも遅れて他の攻略メンバーと同じ様にボスに攻撃していく

《Sideリュウガ》

俺は煽りによつて士気を取り戻した攻略メンバーは次々とボスに攻撃をしかけていく

リュウガ「チマチマと……。そろそろ飽きてきたんだよな、こいつにも」

俺は第1層のボスと何回も剣を交えていると相手の癖と行動パターンが分かり。流

石に30分も同じことを繰り返していると飽きてくる。なので、狩技でデカイ隙を作ることにした

リュウガ「おい、野郎共よく聞けよ！今から大技を出して、アイツにデカイ隙を作らせる。その隙ができたらフルアタックを決める!!」

俺は攻略メンバーから返事を聞かずに、霸神劍はじんけんイクセエムカムを両手持ちに切り換え、狩技を発動する

リュウガ「狩技！震怒竜怨斬!!」

大剣を肩に二回担ぐ様なモーションを取り、黄色のオーラが体を包みこみ。勢いを着けてボスの武器に目掛けて大剣を振り下ろす。その時まで溜めていたエネルギーも大剣に移して一緒に放ち、ボスの武器が弾かれ大きく仰け反り、後ろに転倒する。

リュウガ「今だ、野郎共!!」

「「おおおおお!!」」

それから色々のスキルエフェクトが光り、あつという間にボスはポリゴンとなり、消えていく。その後、ボス部屋の中央に『Congratulations!』と表示され。各自の目の前に今回のリザルトが表示された。

それを見たは歓喜の声をあげる者や、嬉しさの余りに泣き出す奴もいた。

俺は剣を背中に背負い直すと、リザルトを全て流し読みをして。第2層に続く螺旋階

段を進むと後ろから声をかけられる

《Sideキリト》

キリト「おい、アンタ！一体、何者なんだ!？」

俺は、鎧の男にそう問おうた

鎧の男「俺か？俺はハンター。モンスターを狩る者だ」

鎧の男は、ハンターと名乗り。螺旋階段を登って行くのを俺はただ見ることしかできなかつた

キリト「ハンター……」

この時の出会いが俺のライバルであり、最高の相棒になるなんて思いもしなかつた。

《Sideリュウガ》

リュウガ「あつ！アルゴに状況報告しないと」

俺は螺旋階段を登り切った辺りでアルゴに攻略成功のメッセージを送ることを思い

でした

リュウガ「これでよし！」

『アルゴへ

報告だ。

今回のボス攻略の犠牲者は一人。他には犠牲者無し。それとラスト・アタック・ボスは取れてない。

このまま第2層の攻略に入りながら、モンスターの情報を集める。
以上だ

リュウガより』

リュウガ「さて。新しいフィールドで、一狩行きますか！」

こうして、アインクラッド初のボス攻略は幕を閉じた

ハンターと剣の世界4

第1層のボスを倒してから約3ヶ月以上が過ぎた。現在の最前線は第18層。10層辺りからは何故かモンハンのモンスターまで出るようになった。主にランゴスタやカンタロスなどの小型モンスターだけだが、いずれは大型モンスターが出ると思っている。

それから、なんとオトモアイルーを手に入れました。第15層辺りで採取探索をしていると秘境エリアに転移させられたらしく……。そこでアイルーが一匹だけいた。なので近づくとかエスチョンマークが出たので話しかけてみると、オトモにするか？と書いてあったのでオトモにしました。

そして今はというと……

リュウガ「えつと……貴女がリズベットさんでいいのか？」

リズ「は、はい！私がリズベットです！」

リュウガ「そんなに畏まらなくていいよ。俺も堅苦しいのは苦手なんだ」

リズ「う、うん。分かったわ！えつと……」

リュウガ「ああ。これは悪かった。今回の依頼を担当する。採取専門の狩人で名前はリュウガだ。

よろしく」

リズ「採取専門っていうことは……」

リュウガ「ああ。討伐やモンスターの素材集めは基本的にハンターの役割だ」

リズ「もしかし、リュウガって……」

リュウガ「あのハンターの弟子だよ。あの人に憧れて運良く弟子入りしたはいいけど……」。修行が地獄だよ……」

リズ「えつと内容を聞いても……」

リュウガ「5日間、フィールドで野宿で飯は現地調達……」

リズ「うわああ……」

リュウガ「地獄だろ？」

リズ「そうね……」

リュウガ「つと、まあ。こんなに感じて師匠に認めてもらって採取専門のハンターをやってるんだ」

リズ「なるほどね。ところで、リュウガの後ろにいる猫はタイムモンスターなの？」

リュウガ「そうだ。コイツはオトモイルーのアーサーだよ」

アーサー「にやつにやー！（こんにちは、アーサーです！）」

リズ「えつと……。なんて言ってるか分かる？」

リュウガ「こんにちは、アーサーです。だつてさ」

リズ「そ、そう。よろしくね、アーサー」

アーサー「にや！（はい！）」

それぞれ挨拶を終えてリズベツトはアーサーと握手をする

リュウガ「自己紹介も終わったことだし、そろそろ採取に向かうか？」

リズ「そうね、行きましょう」

そうして、俺とアーサー、リズベツトの三人は火山地帯のフィールドに出た

リズ「あ、あづいゝ」

リュウガ「大丈夫か？」

火山洞窟の中に入ると尋常じゃない程、中は暑いのだ。モンハンでよくあるクーラー

ドリンクが無いとダメージ受ける、みたいな使用はなく。代わりに凄く暑さを感じ

るようだ。

リズ「なんでリュウガは、こんな暑い中を平然としてられるのよ？」

リュウガ「それはな、これ！」

俺はポーチからあるアイテムを取り出した

リズ「何それ？ポーション？」

リュウガ「取り敢えず、騙されと思って飲んでみるよ」

俺はポーチから出したのは『クーラードリンク』それをリズベットに渡した

リズ「分かったわ。リュウガを信じるからね？」

リュウガ「おう。依頼主に優しいのが狩人の心得だからな！」

リズベットは俺から渡された。クーラードリンクを一気飲みする。

リズ「何これ・・・すごい！さっきの暑さが嘘の様に消えた！」

リュウガ「だろ？狩人印のクーラードリンクだ！一定時間の間はフィールドによる暑

さを感じなくするんだよ」

リズ「スゴいわねこれ！売れば儲かるんじゃないの？」

リュウガ「ん？考えたけど、やらない」

リズ「なんで？」

リュウガ「だって、それは俺と師匠にしか作れないし………。何より師匠に怒られた

くない」

リズ「なるほど、理解したわ」

そんな他愛ない話しをしながら火山洞窟の奥へ奥へと進んでいく。

そうして、目的地に着くと・・・

リュウガ「こっこ掘れピツケル♪こっこ掘れピツケル♪」

アーサー「んにゃ！んにゃ！（えいさ！ほいさ！）」

リズ「鉱石がざつくざく♪」

と俺たちはピツケルで鉱石を掘りまくっていた。

それから約二時間が過ぎてリズのアイテムストレージが大分一杯になったので街に帰ることにした。その途中で大きな岩？みたいな物に発掘ポイントがあったため、リズベットは大きな岩に向かって走りだし。ピツケルで掘り始めようとする

リズ「発掘ポイント、見つけ！」

リュウガ「あれは……。確か……」

俺があるモンスターを思い出している時には既にリズベットがピツケルを振りかぶっていた

リュウガ「待て、リズ！そいつは!？」

リズ「え？」

リズベットがピツケルを振りかぶって止まると、大きな岩が【ゴゴゴゴゴ！】という

音を立てながら動き出した

リュウガ「リズ！今すぐ、そいつから離れろ!!」

リズ「うわああああ!!?」

リズベツトは俺の声と、息なり動き出した岩に驚き、こちらに全速力で走ってくる。動き出した岩の正体はバサルモスだった。

リズ「な、何あれ!」

リュウガ「多分、中ボスだと思う……」

リズ「え、嘘!? どうするのリュウガ？アイツのせいで帰り道が塞がってるわよ!」

そうバサルモスが動き出したことにより、出口が塞がり。バサルモスを倒すか、転移結晶で脱出するしかないのだ。

リュウガ「どうしたらいいと思う、アーサー?」

アーサー「うにや、にやくお！（私は、主にお任せします!）」

リュウガ「任せると言われてもな……」

リズ「二人して、何を呑気に話してるのよ！この状況をどうするのよ!」

俺はあること決断し、それをリズベツトに話す

リュウガ「なあ、リズ?」

リズ「な、何よ!」

リュウガ「ここから安全に出れる方法があるんだが、他言無用を約束できるか？」

リズ「するから！なんでも約束するから！」

リュウガ「その言葉、忘れるなよ！」

【BGM：英雄の証】

俺は装備メニューを出して、リオソウルZに防具を換え、武器はチャージアックスの『THE・セイヴァー』を装備する。

リズ「リュウガ、その装備は一体・・・」

リュウガ「それは後だ。アーサー、リズのことは頼んだぞ！」

アーサー「にや！（了解！）」

とアーサーは敬礼する。それを見た俺はTHE・セイヴァーを背中から引き抜き、右手に剣を、左手に盾を持ちながら、バサルモスに向かって歩きだす。

リュウガ「さて、今回も・・・一狩行きますか!!」

俺はバサルモスの前に立つとバサルモスも俺を見つけたのか咆哮をしてくるが、リオソウルZには色々と装飾品を着けているためスキルが、見切り+3、高級耳栓、暑さ無

効、会心撃【属性】がついているため。咆哮は効かない。

咆哮が終わると直ぐ様、翼を広げて突進してくる。それをステップで回避して、無防備になった腹に斬撃を入れる。

リュウガ「セイツ！ハアツ！デヤツ！ウラツ！」

まずは、剣を振り下ろし、次に振り上げ、時計回りに回転切りを決め、その後は力を少し溜めて上、下と勢い良く、バサルモスの腹を切り裂く。

そして、切り裂く時に黒い稲妻が走る。

リズ「あんな堅そうなモンスターを簡単に切り裂くなんて……それにあの黒い雷のエフェクトは何なのよ!？」

その後はバサルモスも俺を引き剥がそうと回転しながら短い尻尾で攻撃をしてくる。それを盾で防ぐと剣の柄の部分が黄色光が灯りだす。それからまた、何回かバサルモスに攻撃を当てると、黄色い光がやがて赤に変わる。

リズ「何、あの黄色から赤に変わった光は？」

光が赤に変わったのを確認すると剣を盾に戻して盾の中にあるピンに「ガジャン！」とチャージする。次に剣を剣モードから斧モードに変えて。剣道の八相の構えをして、ピンに溜めていたエネルギーを盾に溜める

リズ「あれはエネルギーを盾に溜めてるの？」

それから最初と同じ様にバサルモスに斬撃を与えて剣に光が灯り、ビンに溜める。次も剣に赤い光が灯ると……………

リュウガ「よし。溜まったな！行くぜ、狩技！オーバリーミット!!」

オーバリーミットの効果はチャージアックスの属性ビンにチャージできる量を増やす効果。

俺は新しく増えた属性ビンに剣に溜まっているエネルギーをチャージする。属性ビンに溜まった数は9本。

リュウガ「これでも喰らいやがれ、狩技！エネルギーブレード!!」

俺はチャージアックスに溜めていた。全エネルギーを狩技のエネルギーブレードに使い解き放つ。

俺が放った。エネルギーブレードはバサルモスに見事命中して、バサルモスはポリゴンなり消えた

リス「何通、出鱈目なパワーよ……………」

リスベツトは俺の色々な技と、その威力に驚き口が開きっぱなしである。

俺はバサルモスを倒したの確認すると剣を盾にしまい。チャージアックスを背中に

背負う。

リュウガ「まあ、こんなもんか……」

そんな感想を口にしてると……

リズ「ちよつとリュウガ！アンタ、今の装備とソードスキルは何!?」

リュウガ「それはだな……」

それからリズベツトから質問責めにあい、色々と話した。

リズ「そつか……。アンタがああ攻略組最強のハンターだったとはね」

リュウガ「色々と黙ってて、悪かったな」

リズ「仕方ないわよ。あんな装備とあの……狩技だけ？そんなの持つてるなんて

知られたら。どんな目に合うか……」

リュウガ「サンキューな。それと、もしよかったらフレンド登録しないか？」

リズ「え？いいの？」

リュウガ「ああ。ちょうど鍛冶師を探してたからな。リズがよければ、取引しないか

？」

リズ「取引？」

リュウガ「内容は簡単。俺が集めた鉱石をリズが買ってくれればいい。逆にリズは俺に素材採取の依頼をしてくれていい。ただし、鎧姿の時の俺のことをハンターと呼ぶこ

と。それと俺の正体を誰にも言わないこと、OK?」

リズ「OKよ。それならこっちも儲けが出るからいいわ。これからよろしくね。ハンターさん」

リュウガ「おう。よろしくなリズベット」

そうして、俺は新しくフレンドリストにリズベットが追加された

ハンターと剣の世界5

リズベットとの依頼から7ヶ月過ぎて、現在の最前線は50層。通称、第2クウオーター・ポイントと呼ばれる階層だ。何故、そう呼ばれるのかは25層の時にバカなインクラッド解放軍が単独でボスに挑み壊滅したからである。

そして俺は今、とあるギルドの本部の前に来ている

リュウガ「どうも、採取屋のリュウガです。アスナさんとユウキさんに面会を頼めますか？」

門番「少々お待ちを」

とあるギルドとは血盟騎士団である。今では最強ギルドと名を馳せている

門番「許可がおりましたので、こちらに」

門番が指示する方向へ、俺は歩きだす。

リュウガ「どうも」

それなら中に入ると・・・。

ユウキ「リュウガアアア!!」

と毎度のこと。ユウキが俺に飛び付いてくる。

何の？俺のこと好きなの？勘違いしちゃうよ？

マジで

とボツチを孤高だと言っている少年の真似を脳内で

していると……

アスナ「ユウキ。毎度毎度、リュウガ君に飛び付つくのは、止めなさい。女の子としてはしたくないわよ？」

ユウキ「ちえく、アスナは硬いなく」

リュウガ「まあまあ、その辺にしとけよ。二人とも。ハンターからの伝言を伝えにきたぞ」

アスナ「分かったわ。場所を移しましょう」

リュウガ「了解だ」

リュウガ「今回のボスは雷を使う狼らしい」

アスナ「雷を使う狼……」

リュウガ「師匠が言うには、他のゲーム……。それも今から10年くらい前のゲームに出てくるモンスターに行動パターンがほぼ同じだったさ」

アスナ「そう。なら安心ね」

リュウガ「これが、行動パターンをメモした紙だ」

俺はアスナに今回のボスの行動パターンを書いた紙を渡す

アスナ「なっ！あの人、一人でHPバーを一本まで減らしたの!?!」

ユウキ「へえー！やっぱ凄いな、ハンターは！」

そりゃあ、双剣のエリアルでボコボコにしましたもん

ユウキ「でも、なんで倒さなかったのか？」

アスナ「それは、ハンターと団長が何やら取引をしたらしくて。単独でのボス攻略はしない契約みたいなもの」

ユウキ「なるほどね」

リュウガ「それと名前なんだけど、ジンオウガってのが呼び安いつてさ」

アスナ「ジンオウガ……。そうね、一々【Rising of OGRE】なんて呼びにくいものね」

ここで、皆さんは当たり前前の如くお気づきだろう。今回のボスは、まんまジンオウガです。なぜか40層辺りからモンハンの大型モンスターがボスとして現れることに

なつたのだ。

40層はダイミヨウザザミ。

41層、ガララアジャラ

42層、ゲネル・セルタス&アルセルタス

43層、ディアブロス

44層、リオレウス&リオレイア

45層、ウラガンキン

46層、グラビモス

47層、ライゼクス

48層、デイノバルド

49層、ドボルベルグ

ときている。いまいち、どんな順序や関係性で絞られているのかわからない。

それから話しは進んで行き三日後にボス攻略を行うこととなった。

アスナ「君も、レベルは攻略組と変わらないんだからボス攻略に参加してほしいんだけな？」

リュウガ「悪いな。俺は腰抜けだから。じゃあ、師匠には俺から伝えておくから」

アスナ「うん、お願い」

リュウガ「じゃあ、また。狩人印をご鼻屑に」

あれから三日が経ち、今は・・・

リュウガ「チャージし始めたぞ！アタッカー、フルアタックをきめろ！」

ボス攻略が始まってから3時間が経過している。

攻略組の皆はかなり疲弊している。HPはアーサーが真・回復笛の術と硬化笛の術で、犠牲者を出していない。

俺は今回、アタッカーとしてだけでなくタンクとしても前に出ている。装備は防具がグラビXの一式、武器がランスの『ロストバベル』。盾の範囲がデカイのが嬉しい。それとスキルだが、ガード性能+2、攻撃力up【中】、ガード強化、スタミナ急速回復がついている。

リュウガ「アタッカー下がれ、放電するぞ！タンクはさつきと同じように交代して守りを固めろ。メインのタンクは俺とヒースクリフが行う」

タンクたち「了解！」

それから1時間。ようやくジンオウガのHPバーがラスト少しになり。咆哮をしたので一度様子を見ようとしたが・・・

リュウガ「念のため、一度様子を見るぞ！」

ユウキ「ボクが決めるよ！」

リュウガ「おい、バカ！」

ユウキが俺の指示を聞かずにジンオウガに突撃していき、ソードスキルの構えをする
とジンオウガは一度距離を取った

ユウキ「え？」

リュウガ「クソ、間に合え！」

俺はランスを投げ捨てて、ユウキの前に出てユウキを守るとように抱き締める

ユウキ「は、ハンター!？」

次にジンオウガが取った行動は背中から落ちてくる。フライングボディアタックだった。俺はそれをモロに背中から体全体にジンオウガによって生み出される電撃と衝撃を受けてしまう

リュウガ「グハツ!？」

ユウキ「きゃあああ!？」

そのまま、ユウキを抱き締めなから壁に叩きつけられて俺は意識を失う。幸い、意識を失う寸前にユウキの安否は確認できた。

《sideユウキ》

ボクはハンターのお掛けでボスの攻撃から守ってもらったのわかる、けど今は何故、壁際にいるのか分からないでいた。

アスナ「ユウキ！大丈夫？」

ユウキ「う、うん。ボクは大丈夫……」

アスナ「そう。よかった……」

アスナが心配して駆け寄って来た時にはもう、ボスは倒されていた。

ユウキ「そういえば……ハンターは？さつき、助けてもらったからお礼が言いたいんだけど」

アスナ「それが……」

アーサー「にや、にやー！んにやーお！（起きてよ、ご主人！ねえ、起きてつてば！）」
ポロポロ

キリト「おい、ハンター！ハンター！」

ハンターのタイムモンスターで確か……アーサーとか言ったっけ。なんで、アーサーは泣きながらハンターを揺すってるの？キリトも凄いな血相でどうしたんだろ？それになんであんなに叫んでも起きないんだろ？

ユウキ「ねえ、ハンター。キリトとアーサーが呼んで……」ビチャツ！

ボクはハンターの元に行く、足で何かの液体を踏んだ様な音が聞こえた。足元を見ると赤い液体を見た。

ユウキ「え？嘘……嘘だよ？ハンター、ねえてば！」

ボクはその赤い液体がハンターから流れる血だとすぐに分かった。けど周りの人たちは分かってないみたい

キリト「クソ!?なんで失血状態が治らないんだよ!？」

ユウキ「やっぱり、これって……ハンターの……」

ボクは自分のせいでハンターが血を流したことに後悔と、ハンターが死んでしまうのではないかという恐怖にへたりこむ

アスナ「どうしたの、ユウキ!ってこれは……」

ヒースクリフ「どうしたんだね、アスナ君。なんだこれは……」

ヒースクリフ団長もボクの様子がおかしいと思っただのか心配に来てくれた。

ヒースクリフ「急いで彼を血盟騎士団のホームに運ぶんだ！急げ！」
とヒースクリフは血盟騎士団の団員たちに指示を出す

「了解！」

団員たちはハンターを運ぼうとする時に誰かの手がハンターの甲冑に当たり、ハンターの甲冑が取れてしまう

「え!?」

キリト「嘘だろ……」

アスナ「そんな……」

ユウキ「え?リユウガ……そんな。いや……いや、いやあああ!?」

アスナ「ユウキ！」

ボクはハンターがリユウガだと分かると好きな人をボクは傷付けてしまったことに恐怖して気を失った。

ハンターと剣の世界6

《sideユウキ》

ボクがボスの部屋で気を失って、次に目を覚ました場所は血盟騎士団のホームだった。

ユウキ「んん、ここは……？」

アスナ「ユウキ！よかった、目が覚めたんだね」

ユウキ「あれ、アスナ？ボクはいつたい……」

アスナ「ボス戦でハンターがユウキを庇って負傷して。その後、キリト君とアーサー君がハンターを心配して介抱に行っただけ……」

ボクはアスナの説明で、さっき起きていた事実を思いだす

ユウキ「そうだ！リユウガは？リユウガはどうなったの？」

アスナ「それが……まだ目を覚まさないの……」

ユウキ「ボク、リユウガのところに行ってくる！」

アスナ「ユウキ、待ちなさい!」

ボクはアスナの言葉を聞かずにホームの中をあちこち走って、リュウガを探した
ユウキ「はあ、はあ、はあ、はあ。み、見つけた」

やつとのことでリュウガが眠っている部屋を見つけた。でも、その部屋に入ると、ま
たボクを後悔と恐怖の淵に連れていった。

ユウキ「リュウガ、入るよ……。ッ!?嘘……なんでこんな傷だらけなの!？」

部屋に入ったボクに一番最初に目に入ったのは、頭と右腕と腹に包帯を巻いて眠って
いるリュウガだった。

キリト「ああ。ユウキか、目が覚めたんだな」

ユウキ「ねえ、キリト。なんでリュウガはこんなに傷だらけなの!？」

キリト「俺にも分からない。けどこれは今回のボス戦だけの傷じゃないことはすぐに
分かった。リュウガはハンターとして、攻略組の皆を守るために自分一人でボスと対峙
すること何度もあつたらう?」

ユウキ「うん。ハンターはいつも一人でボスのヘイトを集めてたね」

キリト「多分。これはその傷が完全に治っていない状況で挑んだ結果だろうな」

ユウキ「そんな……。ボクは……。ボクたちはハンターを……。リュウガを頼りすぎたん
だ」

キリト「そう……。だな」

ボクがキリトとそんな話しをしていると、部屋の外からノックが聞こえる

キリト「どうぞ」

ヒースクリフ「失礼するよ。二人とも」

部屋の外から入ってきたのはヒースクリフ団長とアスナだった。

ヒースクリフ「ハンター……。いや、今はリュウガ君と呼んだけれうがいいか。彼の容態は？」

キリト「ああ。失血状態は何とか治ったが、今だに目を覚まさない。それとこの傷跡を見てくれ」

ヒース「これは!？」

キリト「多分だが、リュウガはこの世界で唯一、現実と同じように痛みを感じケガをする。ケガをすれば血が流れるようなバグが発生していると俺は思う」

ヒース「まさか、そんなバグがあるとは……。これまで、リュウガ君にはハンターとしてかなり助けられた。今後は彼に頼り過ぎないように気をつけなければ」

キリト「ああ。できるだけリュウガの負担にならないようにしないとな」

ヒースクリフ「ユウキ君」

ユウキ「は、はい！」

ヒースクリフ「君に一時、休団を命じる」

ユウキ「それって……」

ヒースクリフ「彼の側にいなさい。それと今回の件で君を脱退させるかはアスナ君と考える。以上だ。」

ユウキ「わかり……ました」

ボクは自分の失敗でギルドから追放されることよりも、今後、リュウガが目覚まさないんじゃないかという恐怖に怯えていた。

アスナ「ユウキ……大丈夫だから。リュウガ君はきつと目を覚ますから、ね？」

ユウキ「うん……」

アスナはボクが恐怖で震えているのを、そつと優しく抱き締めてくれた

アスナ「今は私とユウキ、それとリュウガ君とアーサー君しかいないから泣いていいよ」

ボクはアスナのその言葉で我慢してた感情が爆発する

ユウキ「どうしよう、アスナ！ボクの、ボクのせいでリュウガが目覚まさなかったら！ボク、ボク……」ポロポロ

アスナ「大丈夫、大丈夫だから。リュウガ君は必ず目を覚まから。その時は笑顔で迎えてあげよ？だから、今は我慢せずに泣いていいよ」ナデナデ

ユウキ「うう……うわああああん」ポロポロ

アスナは泣き叫ぶ、ボクを優しく撫でてくれた

《Sideアスナ》

私はユウキが泣き止むまで、ずっとユウキを撫でいた。するとユウキは泣き疲れたのか眠ってしまった

ユウキ「すう〜、すう〜」ZZZZ

アスナ「ユウキだったら。こんなに涙を目の端に溜めて」

ユウキ「リユウガ〜、すう〜、すう〜」ZZZ

アスナ「本当にユウキはリユウガ君が好きなんだね」

私はユウキをリユウガの隣にあるソファーに寝かせ、部屋を出る

アスナ「さつきはユウキの配慮をありがとう、キリト君」

そう、さつきユウキが泣く前にキリト君はユウキには見えないように団長にハンドサインして部屋を出ていったのだ

キリト「いや、ユウキだってまだ子供だ。仕方ないさ」

アスナ「あら？私やアナタだって子供じゃない？」

キリト「そうじゃなくて、ユウキの身長からするに多分、まだ中学1生辺りだと思う」

アスナ「なるほどね」

キリト「俺は変に大人びているってリアルの知り合いに言われたことがあるかな」

アスナ「私も家が家だったし……」

それから少し話しをして解散した。

《sideユウキ》

リュウガが倒れてから5日が過ぎた。けど、今だにリュウガは目を覚ます気配がない。ケガは頭の傷以外完全に治っているのに。

ユウキ「リュウガ……早く目を覚ましてよ」

アスナ「ユウキ、入るよ？」

ユウキ「うん……」

アスナ「リュウガ君の容態はどう？」

ユウキ「全然、起きないよ……」

アスナ「そっか……」

ボクはアーサーを膝の上で撫でながらアスナとリュウガの容態について話した

アーサー「ゴロゴロゴロゴロ（気持ちいいにゃ〜）」

アスナ「アーサー君は気持ち良さそうだね」

ユウキ「うん。アーサーが言うには依頼がない日は日向でいつもこうしてもらってたみたい」

アスナ「ユウキはアーサー君の言葉が分かるの!？」

ユウキ「なんとなくだけどね?」

アスナ「すごいね」

ボクとアスナがそんなリユウガに関する話したをしてしていると……

リユウガ「ん、ん」

リユウガに動きがあつた

リユウガ「ここは……俺は確か……ユウキを守るために」

ユウキ「リユウガ……。リユウガアアア!!」ダキッ

リユウガ「うわ!?ユウキ、どうしたんだ?」

ユウキ「どうしたんだじゃないよ!心配したんだから!」ポロポロ

リユウガ「えつと……。話しが見えないんだが……」

《sideリユウガ》

俺は目を覚ますと知らない天井があり、体を起こすとユウキ息なり抱きついてきた。

リュウガ「ここは……俺は確か……ユウキを守るために」

ユウキ「リュウガ……。リュウガアアア!!」ダキッ

リュウガ「うわ!?ユウキ、どうしたんだよ?」

ユウキ「どうしたんだじゃないよ!心配したんだから!」ポロポロ

リュウガ「えつと……。話が見えないんだが……」

俺はユウキが泣き出しているのと現在の状況が理解できないでいた。なので隣にいるアスナに聞くことにした。

リュウガ「えつとアスナ。現在の状況を教えてくれるか?」

アスナ「いいわよ。えつとね……」

アスナ副団長様からの説明中

……という訳なのよ」

リュウガ「なるほどな、俺がハンターだったのとケガをすることもバレちゃったのか……。てかユウキ、もういい加減に泣き止めよ」

ユウキ「だって、だってえ!」ポロポロ

リュウガ「はあく、心配かけたの悪かったよ」

ユウキ「本当に悪いと思ってるの?」グスッ

リュウガ「思ってるよ。お詫びに何か俺にできることなら何でも一つお願いを聞いて

やるから」

ユウキ「分かった。なら泣き止む」

リュウガ「げんきんな奴」

アスナ「イチヤイチャするのは後にして、リュウガ君はまだ安静にしてなさい。頭のケガはまだ治ってないんだから」

リュウガ「え？」

俺はアスナの言葉で頭に手を当てると何かゴワゴワとした布のような物を巻き付けられていた

リュウガ「な、何じやゴリヤア!!」

俺は頭に包帯が巻かれていることに驚き、何処ぞの刑事さんみたいな叫びを上げてたことにより、頭に痛みがはしる

リュウガ「痛っ!!」

アスナ「だから安静にしてなさいって!それとアーサー君、ご主人様が目を覚ましたよ」

アーサー「にや?にやにや!?!にやんにや〜!

(え?主人!?!主人が目を覚ました!)「ダキッ

リュウガ「アーサーにも心配をかけたな」

アーサー「にやにや！にやにや！（ご主人！ご主人！）ポロポロ

リュウガ「まったく、ユウキといい、アーサーといい、泣き過ぎたぞ？」

アスナ「それだけリュウガ君が心配だったってことよ」

リュウガ「そうだな」

アスナ「じゃあ、私は団長やキリト君たちにリュウガ君が目を覚ましたことを伝えてくるよ」

リュウガ「何から何まですまないな」

アスナ「なら私もリュウガ君に貸し一つで」ニコ

リュウガ「はあく、分かったよ」

アスナ「じゃあ、また後でね」

アスナは俺に貸しを一つ作れたことに嬉しかったのか、ご機嫌で部屋の外に出ていった。それから二時間後、ヒースクリフ、キリトがアスナを筆頭に部屋に入ってきた

ヒースクリフ「リュウガ君、容態はどうだね？」

リュウガ「まだ頭が痛むが、攻略に支障はないと思う」

アスナ「そんな体で攻略をするつもりなの!？」

ヒースクリフ「そうか……」

アスナ「団長!？」

キリト「リュウガ、お前に聞きたい。お前はユニークスキル持ちなのか？」

リュウガ「一応、スキルもあるがあまり使ってない」

キリト「スキルも？」

リュウガ「ああ。主に俺が使ってるのはユニーク装備だよ」

キリト「はあ!?!ユニークスキルにユニーク装備だ?!」

リュウガ「ああ。この世界にログインしてから既に二つともあったんだよ」

ユウキ「そっか!だからボクと初めて会った時に俺のことを他言無用で頼むって言うてたのか」

リュウガ「そう言うこと」

アスナ「えっと、二人は最初から知り合いだったの？」

ユウキ「うん、ボクが第1層で死にかけたところを長い剣と居合いの技で助けてくれたんだ」

キリト「長い剣？」

リュウガ「ああ、太刀のことか」

俺はユウキがいう、長い剣こと太刀をアイテムストレージから出す

リュウガ「ユウキと会った時に使ってたのは、確かこれだろ？」

ユウキ「そう、それ！」

俺が出したのは『深雪しんせつ一文字いちもんじ』【幻日げんじつ】』である。

キリト「なんだよ、この長さ!?!これを軽々と今まで振ってきたのか?」

リュウガ「ああ、そうだが?」

キリト「あ、ありえねえ」

キリトは俺の太刀を見てあり得ないと言ってたが太刀の長さは刀身だけで150cm、全長で206cmもあるのだ

ヒースクリフ「リュウガ君。ユウキ君が言っていた居合いの技とは、君は現実で居合いの習い事でもしていたのかね?」

リュウガ「それは違う。ユウキが言ってるのは狩技だ」

アスナ「狩技?」

リュウガ「取り敢えず、何処かで見せるよ」

ユウキ「無理しないでよ?」

リュウガ「分かってるよ」

そして、俺たちヒースクリフを除いたメンバーで何処か適当なフィールドに出ることにした

フィールドに出ると俺たちは手ごろのモンスターを探していると、ちょうどハチミツをたべている、アオアシラを見つけた。

リュウガ「お！アオアシラ、見つけ！」

ユウキ「なんかハチミツ食べてるよ。あのモンスター」

アスナ「そうだね……」

キリト「まさに熊だな」

リュウガ「それじゃあ、狩技を見せるぞ？」

アスナ「ええ」

俺は太刀を背中から抜き、ゆっくりとアオアシラに近づく。するとアオアシラも、こちらに気づいたのか威嚇の咆哮をして、突進してくる。

リュウガ「悪いけど、とっとと終わりにして、飯を食いたいから本気でいくぜ！」

俺はアオアシラの突撃を避け、太刀で数回切りつけ、気刃切りを三回決め、最後に気刃大回^{きじんたいかいてんぎ}切切りをきめる。

キリト「なんだ、あれ！刀身から白いオーラみたいのが出てるぞ？」

アスナ「あれも狩技なの、ユウキ？」

ユウキ「ボクにも分からない。あれは初めて見たよ」

キリト、アスナ、ユウキは太刀の刀身に白いオーラが纏まり付いたことに驚いていた
アーサー「にやにや、うんにや〜お！（あれは、練気状態れんきじょうたいの白だよ）」

アスナ「ユウキ、アーサー君はなんて？」

ユウキ「うん、アーサーが言うにあれは練気状態れんきじょうたいの白だつて」

キリト「ユウキ、アーサーの言葉がわかるのか!？」

ユウキ「うん、なんとなくだけど……」

三人と一匹がそんな話をしているとリュウガは、先程も同じようにアオアシラに
気刃大回転切りきじんたいかいてんぎを決める

キリト「今度は黄色か……」

ユウキ「アーサー。あれは何段階まで上がるの？」

アーサー「にやにや、にやんにや〜お！（あれは、三段階までしか上がらないよ!）」

キリト「なんて？」

ユウキ「あれは三段階しか上がらないつてさ」

アスナ「なら次でどこまで強くなるかが見物ね」

キリトたちがリュウガの練気状態れんきじょうたいのことで話しているとリュウガは最後に

気刃大回転切りきじんたいかいてんぎを決めた

キリト「最後は赤に変わるのか……」

アスナ「リュウガ君！そろそろ狩技は使える？」

リュウガ「ああ、使えるぞ！」

アスナ「ならお願い！」

リュウガ「OK！」

俺はゆつくりとアオアシラとの距離を積める

リュウガ「行くぜ、狩技！桜花おうかきしんざん気刃斬！」

俺は一度バックステップを踏み、勢いを付けてアオアシラに向けて回転切り二度を決め、太刀を背中の鞘に戻す

アスナ「単なる回転切り？」

キリト「いや、違う。よく見てみる」

アスナ「え？」

アスナには分からなかったが、桜花おうかきしんざん気刃斬を決められたアオアシラの体に追い討ちとばかりに切られた箇所から無数の斬撃がアオアシラを襲い。やがてポリゴンとなり消滅する。

アスナ「す、すごい……」

リュウガ「ふう〜、終わった〜！腹減った！」

ユウキ「ならボクがご飯を作ってあげようか？」

リュウガ「マジで！なら頼むよ、ユウキ」

ユウキ「うん、任せて！腕によりをかけて作るから」ニコ

ユウキは腕を捲るポーズをする

リュウガ「お、おう！」

この時のユウキの笑顔に俺は恋した。

それから一度、血盟騎士団のホームに戻るとヒースクリフに報告するために団長室に俺、ユウキ、アスナ、アーサーの三人と一匹が入ることになった

ヒースクリフ「それではアスナ君。報告を聞かせてもらおうか」

アスナ「はい。リュウガのユニークスキルですが……」

アスナがヒースクリフに報告をしている中、俺は早く飯を食べたいという欲に頭をかかられていた

リュウガ「はあく（腹減った……）」

アスナ「以上です」

ヒースクリフ「分かった。それとユウキ君の脱退のことだが……」

リュウガ「はあ!?なんで、ユウキが脱退させられるんだよ!？」

ヒースクリフ「それは君を、最大戦力であるハンターを負傷させたからだよ。リュウガ君」

リュウガ「なっ!？」

ユウキ「いいんだよ、リュウガ……。ボクは元々、自分からギルドを離れる覚悟は出来てたから」

リュウガ「ユウキ……」

ヒースクリフ「それではユウキ君に言い渡す。本日を持って君を血盟騎士団を団長権限を持って脱退を命じる。以上だ」

ユウキ「はい……」

俺はユウキに恋した。ならユウキを救うのは好きになった俺のエゴだろうかやってやる!

リュウガ「ヒースクリフ!」

ヒースクリフ「なんだね、リュウガ君?」

リュウガ「ユウキはギルドを脱退なんだよな?」

ヒースクリフ「ああ」

リュウガ「なら、俺がユウキにどんな事をしてもいいんだな？」

ユウキ「リュウガ？」

アスナ「リュウガ君？」

ヒースクリフ「ああ。構わんよ？」

リュウガ「OK。ユウキ、今から言うことは俺の本心だ。聞いてくれるか？」

ユウキ「う、うん……」ブルブル

ユウキは俺に拒絶されるのが怖いのか体が震えているようだ。

リュウガ「ユウキさん。俺と結婚してください」

ユウキ「へ？」ポカーン

ユウキはあまりのことにポカーンとなつてしまった

リユウガ「なんだよ？俺は一斉一代の覚悟でお前にプロポーズしてるのに／／／／／」

ユウキ「え、えつと……その。／／／」モジモジ

ユウキは俺のプロポーズにモジモジとし始める中、アスナがユウキの背中を押す

アスナ「ほら、ユウキ！」トン

ユウキ「うわあああ!?!」

リユウガ「おっと！」

アスナに押されユウキは俺に受け止めらる形になつた。

ユウキ「え、ええ、えと……。不束者ですが、よろしくお願いします／／／／／」

リユウガ「こ、こちらこそ／／／」

アスナ「ユウキ、おめでどう！」

ユウキ「ありがとう。アスナ」

ヒースクリフ「おめでどう、ユウキ君」

ユウキ「団長も」

ヒースクリフ「まさか、ここまで上手く行くと思つても見なかつたよ」

リユウガ「は？」

ユウキ「へ？」

アスナ「いやね。ユウキがあまりにもリュウガ君が好きすぎるからだから。一度脱退させて、リュウガ君のサポートをしてもらって、ユウキが抱え込むリュウガ君への後悔を解消してから、また私が血盟騎士団に勧誘しよと思つてたんだよ。それとあわよくばユウキとリュウガ君の仲に進展があればなつてね」ニコ

リュウガ「つて、ことは……」

ユウキ「ボクたちは完全に……」

リュウ・ユウ「踊らされたつてこと!?!」

ヒースクリフ「そういうことだ」クスクス

アスナ「そういうことです」ニコ

リュウガ「やられたよ。まったく」

ユウキ「本当だよ。二人とも人が悪いよ」

ヒースクリフ「すまないな」

アスナ「ごめんね、二人とも」

リュウガ「ならユウキの除隊のことは……」

ヒース「それは取り消さないよ。決めたことはそのままだ」

リュウガ「そうか……」

ユウキ「リュウガ。ボクは別に悲しくなかんかないよ？」

リュウガ「ユウキ……」

ユウキ「ギルドに入ってなくなつてアスナやギルドの友達には会えるし。何よりハンターこと、リュウガの……。お、奥さんになれるんだもん／＼／＼／＼」

リュウガ「お、おう。そうか／＼／＼」

俺とユウキが二人して赤面しながら下を向いていると……

アスナ「はいはい。イチヤイチャするのは家に帰つてからにしなさい」

リュウガ「それじゃあ、ユウキは持ちつていくからな。今さら返してくれなんて言われても返さないからな！」

アスナ「分かつたから早く行きなさい！」

ユウキ「それじゃあ、団長にアスナ。長い間、ありがとう。それとこれからも、よろしくね」

リュウガ「俺からと短い間だったか、治療と部屋の提供を感謝する」

ヒース「構わないよ。ではリュウガ君、また次のボス攻略で会う」

アスナ「ユウキも、またね」

リュウガ「それじゃ、次のボス攻略で」

そうして、俺たちは血盟騎士団のギルドホームを出た

ユウキ「ところでリュウガ」

リュウガ「なんだ？」

ユウキ「これから、どうするの？」

リュウガ「どうするって？」

ユウキ「ボク。アスナとルームシェアをしてたから泊まる場所ないんだよ」

リュウガ「なら、俺の家に来ればいいさ」

ユウキ「そっか！」

リュウガ「それに夫婦なら一緒に家に暮らすのは当たり前だろ？」

ユウキ「そ、そうだね。ふ、夫婦なら当たり前だよね／＼／＼」

リュウガ「それと結婚の申請しないとな？」

ユウキ「うん」

ユウキはアーサーを抱きながら、結婚申請のウィンドウから『YES』を押す。すると二人の間に二つのエンゲージリングが出現する。

リングの一つをユウキの左薬指に嵌め、ユウキも俺の左薬指に嵌める。

リュウガ「これから末永くよろしくな、奥さん」

ユウキ「こちらこそ、末永くよろしくお願いします、旦那さん」
そう二人が言い合うと互いに顔が近づき……。

リュウガ「ユウキ……」

ユウキ「リュウガ……」

二人の顔の距離は無くなる

リュウガ「ん……」

ユウキ「ん……」

アーサー「にやうう、にやうあ（やっと、くつついたよ）」

と二人はアーサーに呆れられていることを知らずにリュウガが持つ、22層の家に向かっていた

こうして、リュウガとユウキの甘い結婚の話が始まったのである

~~~~~

アーサー「めでたし、めでたし」

作者「普通にしゃべるんかい!？」（（；。旦那））

## ハンターと剣の世界7

ユウキとの結婚から早二ヶ月。今までより、ゆつくり暮らせていると思う。でも、ボス攻略や依頼は、ちゃんとこなしている。

ユウキ「リュウガ、アーサー。ご飯だよ」

ユウキが朝ご飯ができたのか俺とアーサーを呼んでいる。

リュウガ「よし。行くぞ、アーサー」

アーサー「にやんにや〜（わかりました）」

俺とアーサーがリビングに行く旨そうな朝食がテーブルに並んでいた

「いたたぎます！」

「にやんにや〜！（いたたぎます〜）」

朝食のメニューは至ってシンプルで、白米と味噌汁、焼き魚、野菜のお浸し、卵焼き、だった。

リュウガ「ユウキ。この味噌の味、どうやって再現したんだ？」

ユウキ「それはね。ずっと前からリュウガにあることを言ってもらいたくて頑張って

再現したの／／／

ユウキはそう言いながら俯き、こちらをチラチラと見ている。なるほどな。

リュウガ「現実に戻っても、俺に毎日、この味噌汁を作ってくれないか？」

ユウキ「はい！」ニコ

二度目のプロポーズをしてから朝食を食べ終わると二人と一匹して長い椅子に腰かけてのんびりする。

ユウキ「ねえ、リュウガ」

リュウガ「なんだ？」

ユウキ「今日は何の日かしってる？」

リュウガ「ああ。クリスマスだろ？」

ユウキ「うん。だから何処か外食でもしない？」

リュウガ「そうだな・・・ん？」

俺がユウキとの外食を何処にするか考えていると

ユウキ「どうしたの？」

リュウガ「はあく、依頼みたいだ。なんで、クリスマスにも依頼がくるんだよ」

ユウキ「ハンターも辛いね」苦笑

リュウガ「一応、内容だけ見とくか・・・」

俺は依頼内容を見ると、ユウキは俺の顔が険しくなったのが分かったみたいだ

ユウキ「どうしたの？」

リユウガ「今日の深夜0時に第35層でイベントボスが出るらしい」

ユウキ「それで？」

リユウガ「そこにキリトが単身で挑むつもりみたいだ。そこで依頼主からキリトの援護をしてほしいと書いてある」

ユウキ「行くの？」

リユウガ「ああ。キリトは友達だ。見捨てたりななかんかできない」

ユウキ「無茶しないでね？」

リユウガ「大丈夫だよ。今回は近接装備を使わないから」

ユウキ「へ？」

リユウガ「ユニーク装備の中に遠距離型の武器があるんだよ」

俺はメニューウインドウを出して。白疾風のガンナー装備と弓の『曙光弓しよとうきゆう【朔風さくふう】』を  
装備してユウキに見せる

ユウキ「え？弓矢？」

リユウガ「そう。これならバレずに援護できる。

それにスキルも付いてるから」

ユウキ「どんなスキルが付いてるの？」

リユウガ「えっと……回避距離UP、回避性能+2、見切り+3、超会心、隠密、だな」

ユウキ「なんか、聞いてるだけでチートだつて理解ができるよ……」  
リユウガ「それはな……あははは」苦笑

それからは依頼の時間になるまでユウキとお昼寝をしたりして体と心を休めていた。

リユウガ「それじゃあ、外食に行くか？」

ユウキ「うん！」

俺たちは外食をするためと第49層で外食をすることにした

リユウ・ユウ「「転移、ミュージエン！」」

二人で転移門に行き先を問え目的地であるミュージエンに転移する

ユウキ「わあああ！ねえリユウガ、見てよ！雪だよ」

リユウガ「そうだな。今日はホワイトクリスマスだな」

ユウキ「ふっふん♪ふっふん♪」

リユウガ「嬉しいそうだな」

ユウキのそんな姿を見てると下から袖を引っ張られた



リュウガ「ん？」

アーサー「にゃん、にゃんあ（ご主人、寒いです）」ガクブル

リュウガ「ごめん、アーサー！忘れてた」

俺は直ぐにメニユーウィンドウを出し、アーサーのマフモフ装備品を出す

リュウガ「はい、アーサー。マフモフだよ」

アーサー「にゃん、にゃんにゃん（はあく、暖かいです）」

今までアーサーに装備させていたのはブレイブだったので雪が降る中、流石に寒い。

ユウキ「リュウガ、アーサー！早く！」

リュウガ「わかった。直ぐに行くよ！」

俺はユウキに急かされたので、アーサーを抱き抱えてユウキの元へ走る。

ユウキ「もう！何してたのさ？」

リュウガ「いや、アーサーが寒いって言うから装備を変えたんだよ」

ユウキ「そっか！猫は寒いのが苦手だもんね」

アーサー「にゃあ（はい）」

ユウキ「それじゃあ、気を取り直してお店にレッツゴー！」

リュウガ「オー！」

アーサー「ニャー！」

その後はお目当てのお店に入り、ちよつと豪華な夕食を食べてた。食べたあとは一番家に帰ることにした。

家に戻り、少しまつたりとしといると時刻は22時に差し掛かっていた。

リュウガ「それじゃあ、ユウキ。行ってくるよ」

ユウキ「気をつけてね」

リュウガ「わかつてるよ。それとアーサー、俺がいない間はユウキを頼むな？」

アーサー「にや！（はい！）」

アーサーはそう返事をしながら敬礼をする。そして玄関を開けようとすると、後ろから腕を掴まれた

リュウガ「ユウキ？」

ユウキ「そのね・・・リュウガ／＼／＼」

リュウガ「何？」

ユウキ「行つてらしゃいの・・・キスをしたいの／＼／＼／＼」  
「ウツムキ+ウワメ  
ユウキは顔を赤くして上目遣いで、行つてらっしゃいのキスをしたいと言出した  
リュウガ「な、なななな！／＼／＼／＼」

ユウキ「ダメかな・・・？」  
ウルウル

リユウガ「ダメじゃあ・・・無いです／＼／＼」プシュー

流石に上目遣いに涙目は卑怯だと思っただけ、この時のユウキは可愛くて愛しくて仕方がない。

なので、一度頭の防具を外してユウキと「行つてきます」と「行つてらっしゃい」のキスをする

リユウガ「ん・・・」

ユウキ「ん・・・」

リユウガ「それじゃ。改めて、行つてきます」

ユウキ「うん。行つてらっしゃい！」

俺はユウキの笑顔が送り出してくれたので友達であるキリトを今回はちゃんと護衛しようと思い決めた。装備はベリオXにしてある。

リユウガ「転移、ミーシエ」

そして転移門で35層に転移する。転移が完了するとまずは、今回の依頼主であるギルド風林火山のリーダーである。クラインに会う。

リユウガ「よう、クライン。依頼を受けにきたぜ」

クライン「えつと・・・ハンターでいいのか？それとも名前の方がいいか？」

リユウガ「いや、どちらでも構わないよ。もう、名前を隠す必要もなくなったし」苦

笑

クライン「そうか。今回はクリスマスなのに依頼を受けてくれて感謝する」

リュウガ「いいさ。ただし、今回の報酬は高く付くからな？」

クライン「わかってら！せつかくのユウキちゃんとの熱いクリスマスを邪魔しちまうたからな」

リュウガ「ユウキと・・・あ、熱いクリスマス・・・  
／／／／／」プシュー

クライン「お、お〜い大丈夫か、ハンターさん？」

リュウガ「だ、大丈夫」

俺はクラインの「熱いクリスマス」の言葉に色々とユウキの妄想をしてしまった。例

えば、サンタのコスプレをしたユウキとか・・・。

クライン「なら、時間がないから移動しながら、内容を確認しよう」

リュウガ「了解だ。ん？」

クライン「どうした？」

リュウガ「いや、何でもない」

俺はクラインと待ち合わせにしていた店で何人か聖竜連合の奴等を見つけたので警戒をしておくことにした。

リュウガ「クライン、俺は先にフィールドに出ている」

クライン「何でだ？一緒に行けばいいだろ？」

リュウガ「今回は特殊な装備を使うから、あまり人目に付けたく無いんだよ」

クライン「そういうことなら了解だ」

リュウガ「それとそのまま、迷いの森に突入してもらって構わない。こつちは隠密専門の装備に変えるから多分、クラインじゃあ見つけることはできない」

クライン「何か色々とスゲーな、お前さんの装備は・・・」

リュウガ「何せ、ユニーク装備だからな」

俺は直ぐにクラインたちより先にフィールドに出て、ベリオXから白疾風しろはやてのガンナーに変えて、ついでにホットドリंकも忘れずに飲む。

準備を終えると街からキリトがフィールドに現れ、それをクラインたちが追う。

リュウガ「さて、依頼の開始だ」

俺も風林火山と同じようにクラインのことを尾行する。その時、後ろから複数の足音が聞こえてくるのが分かったので、ポーチから煙玉を出す。

そして、それを走りながら落とす。

リュウガ「少しは時間稼ぎにはなるだろう」

俺はクラインたちを尾行しているとクラインが走りから、歩きへと変わった。

そしてキリトを見つけ、クラインはキリトの説得しにかかる。

クライン「よう」

キリト「つけてたのか？」

クライン「まあな。蘇生アイテム狙いか？」

キリト「ああ」

クライン「ガセネタかもしれないねえアイテムに命掛けてんじやねえよ！」

キリト「……」

クライン「このデスゲームはマジなんだよ。ヒットポイントがゼロになった瞬間、現実世界での俺たちの脳も……」  
「だまれよ！」  
「ッ!!」

キリトの冷たい声にクラインは一度驚くが、直ぐにまた説得をし直す

クライン「ソロ攻略なんて無茶は止めるよ！俺たちと組むんだ。蘇生アイテムはドリップさせた奴の物で恨みつこ無し。それで文句ねえだろ！」

キリト「それじゃあ、意味ないんだよ」

キリトはそう言葉にすると背中 of 剣を掴む

キリト「俺……一人でやらないと」

それを見た風林火山のメンバー、クライン以外は武器を構えようとするがクラインに止められる

クライン「オメエをよ。こんな所で死なすわけにはいかねえんだよ！キリト！」

クラインの言葉がキリトの怒りのトリガーになったのか剣を抜く。それと同時に俺が先ほど煙玉で足止めした聖竜連合が現れた

クライン「どうおわあ!？」

キリト「お前も着けられていたな、クライン」

クライン「ああ、そうだな」

すると風林火山のメンバーが聖竜連合の奴等のことを話し始めた

風林火山「ゲツ！こいつら聖竜連合かよ？」

風林火山「レアアイテムの為ならヤバいこともやる連中だぞ」

風林火山「どうする？」

俺はまたポーチから煙玉を取り出して、聖竜連合の奴等に投げる。すると聖竜連合の奴等は息なり白い煙が出たことに混乱しているようだ

クライン「今だ！キリト、お前だけでも行くんだ！（これはリュウガの奴が作つてくれたチャンスだ）」

キリト「クライン・・・」

クライン「いいから、行くんだ！ここは俺たちが食い止める」

それを聞いたキリトはクラインに背を向けて走り出す

クライン「さつきはサンキューな、リュウガ」

リュウガ「どういたしまして」

クライン「そのまま、キリトの奴を追ってくれ」

リュウガ「了解だ」

俺はクラインにそう返してキリトの奴を追うことにした。するとやがて大きなモミの木が見えてきた。また時刻が深夜の24時を示すと空から鈴の音と何か大きな物が落ちてきた。

それはクリスマススのイベントボスだった。ボスは

機械が軋む音を出しながらキリトを捉える

キリト「うるせよ」

ボスはキリトを敵だと判断して、自分が持つていたオノを振り上げるとキリトは雄叫びをあげながら突っ込んでいく

キリト「うああああ!!」

それから何十分が経過しただろうか、俺は護衛ということでキリトを死なせないように回復笛と鬼人笛と硬化笛を使ってサポートをした。

そして、やつのことでキリトはクリスマスボスを倒すことに成功した。

次にキリトは今回の戦利品の中から蘇生アイテムを出して、アイテムテキストを読んでいくと泣き叫び始めた



キリト「うわああ、ああああ!!」ボロボロ

リュウガ「現実には、そんなにうまくないか・・・」

キリト「サチ、ダツカー、テツオ、ケイタ、ササマル」ボロボロ

リュウガ「それが、キリトの蘇生させた人たちか・・・」

俺はただ友達の泣く姿を見ることができなかつた。でも、もしユウキが俺の前から消えたらと思うと胸の辺りがすごく痛くなつた。

キリトがイベントボスを倒してから30分が過ぎた。少しは落ちついたのかキリトはモミの木を後にするのを俺は追いかける

クライン「キリト!」

クラインはキリトが無事に帰ってきたことに安堵したような声でキリトを呼ぶ。しかし、キリトの目に光がやどっていなかつた。そして、キリトは自分の手に握つていた【還魂の聖晶石】をクラインに放り投げた

クライン「お、おい」

キリト「それが蘇生アイテムだ」

キリトから受け取ったアイテムのアイテムテキストを読むクライン。そこには蘇生ができるのは死んでから10秒以内と書かれてい

クライン「え、何々、対象のプレイヤーが・・・10秒以内!?!」

キリト「次にお前の目の前で死んだ奴に使ってやってくれ」

そう言つてキリトは立ち去ろうとするがクラインに肩を掴まれる

クライン「キリト、キリトよ！オメエは・・・生きろよ！最後まで生きろよ、生きてくれ！」

クラインは涙混じりでキリトにそう言った。

キリト「じゃあな」

キリトは最後にそう言い残して俺たちの前から姿を消した。

リュウガ「やはり、現実をあまくなかったな」

クライン「ああ。リュウガ、今回の依頼はこれで完了でいい」

リュウガ「そうか・・・」

クライン「あと、これを報酬として持つて行ってくれ」

クラインは先ほどキリトから受け取った。蘇生アイテムを俺に突き出した

リュウガ「お前!？」

クライン「分かつてる！分かつてるけど、お前だつて一度、死にかけてるんだ！だからユウキちゃんに渡してくれ」

リュウガ「分かつた・・・。なら、ありがたく報酬として受け取っておく」

俺はクラインから報酬を受け取り、なんとも言えない胸の辺りにある感情を抱きながら、ユウキとアーサーが待つ家にかえる。

そして、家の近くになると、まだ家の中に灯りがついていた

リュウガ「ただいま……」

ユウキ「おかえ……ッ!!どうしたの?」

ユウキは俺に元気が無いのに気付き何かがあつたと直ぐに察したようだ  
リュウガ「ちよつとな……」

ユウキ「リュウガ?」

リュウガ「……」ギョツ

ユウキ「ちよつ!リュウガ!」

俺はあんなキリトを見たからなのか、無言でユウキを力一杯に抱きしめる。ユウキが俺の側にいるのを確めていないとどうにかなってしまいそうになるからだ。

ユウキ「リュウガ? く、苦しいよ?」

ユウキの「苦しいよ」の声で我を取り戻し、ゆっくりと力を抜いていく

リュウガ「ごめん……」

ユウキ「ううん。それより、どうしたの? 今回の依頼で何かあつたの?」

リュウガ「じゃあ、ちよつと聞いてくれるか？」

ユウキ「うん」

俺はユウキとテーブルを挟んで座り、キリトがイベントボスを倒した後に泣き叫んでいた内容を話して、その時に感じた思いもユウキに話した

ユウキ「そんなことがあつたんだ・・・」

リュウガ「うん・・・」

ユウキ「でも、ボクはリュウガの前から居なくなつたりしないよ」

リュウガ「分かつてるけど・・・」

ユウキ「大丈夫だよ。もしもの時はリュウガが守ってくれるでしょ？」

リュウガ「当たり前だ！」

ユウキ「なら、不安になる必要はないよ。だから、安心して、ね？」

ユウキは優しい俺の手を握る。何かに怖がる子供を安心させるように・・・

リュウガ「分かつた」

ユウキ「それなら、服を着替えてお風呂に入つておいで」

リュウガ「ああ」

俺はユウキにすすめられるまま風呂に入る。

リュウガ「俺は本当に・・・ユウキを・・・守れるのかな・・・」

そんなネガティブな考えがいつまでも頭によぎる

リュウガ「こんなこと考えちゃダメだ！俺が暗くなればユウキも暗くなっちゃう」

それから湯船で顔を叩き活をいれる。風呂は人生の洗濯する場所だと、人はよく言つたものだ。風呂を出るとユウキが寝間着姿でリビングにて俺が出るのを待っていてくれたようだ

リュウガ「悪いな、待たせちゃったかな？」

ユウキ「ううん。それとやつぱり、ボクもさつきの話しを聞いたら不安になっちゃったよ」

リュウガ「ユウキ……」

ユウキ「だから君が……リュウガがボクの側にいるっていう強く実感をさせて欲しいんだ」

リュウガ「それって……つまり／＼／＼／＼」

ユウキ「うん……ボクはどんなリュウガでも受け止めるよ／＼／＼」

その言葉が俺の理性を崩壊させて、ユウキをお姫様抱っこして寝室に向かった。

昨夜、ユウキと一緒にベッドに入って寝ると、すぐに寝れた。そして、今は……

何だろう。この優しくて、暖かくて、心底から安らぎが感じられる物は……できれば、ずっとこうしていたいな。

リュウガ「ん、ん」

ユウキ「あ、起きた？」

リュウガ「おはよう。ユウキ」ポケー

ユウキ「おはよう、リュウガ」ニコ

リュウガ「うゝん」ポケー

そうか。この安らぎの正体はユウキだったのか。

通りで安心する訳だ

ユウキ「ほら起きて、お風呂に入って朝ごはんにしよう！」

リュウガ「うん、分かった」

そう、俺とユウキは昨晚……。できれば、皆さん、察していただければと……